

# 英作文指導における一つの糸口 —「なる」言語から「する」言語への転換—

A Clue to Teaching English Composition  
—How to Translate “Become-language” Japanese into “Do-language” English—

川村 義治  
Yoshiharu KAWAMURA

## 〈要旨〉

言語の二つの類型として〈する〉言語と〈なる〉言語の区分がある。英語は前者で日本語は後者に類別される。そこで、本稿はまず日英対照の文脈でしばしば取り上げられる〈する〉と〈なる〉、名詞中心と動詞中心、人間志向と状況志向という三つの異なる特徴づけを検証した。考察の結果、三つの異なる枠組みは状況を個体に注目して捉えるか個体を全体に埋没させて連続体として捉えるかという認知の違いに基づく異なる見方であるという結論に至った。

そのような考察から、英作文に役立つ示唆は次のような思考である。日本語は出来事が起きることに記述の中心があるので個々の〈個体〉は必ずしも表出されない。したがって、英訳する際はまず日本語が描写する状況から個々の〈もの〉を掬い取ることが最も重要な作業となる。その際、〈個体〉と〈個体〉の関係を探って、動作主を主語、動作主の作用を受ける〈個体〉を目的語、作用を動詞として配置する。このような手順で作成された英文が〈する〉〈名詞中心〉〈人間志向〉という特徴を持つ。

## 〈キーワード〉

認知, 個体, 連続体

## 1 はじめに

現在、英作文の指導はパラグラフ・ライティングが目され、トピック・センテンスとその内容を支持する後続文の構造と全体の構成を教えることが求められる。しかし、多くの大学生は、基本的な語彙の理解があいまいで文法の知識が不足しており、まず基本的な英文の構成をしっかりと会得することが必要であるというのが実際に指導している人間の実感である。では、文法的にミスがなく文体的にも妥当な英文を作成するには何が必要なのだろうか。基本的な語彙用法や文法の獲得に加えて、日本語と英語の発想の違いを学ぶことが重要であると考えられる。ルーティン化している表現、例えば「またお会いするのを楽しみにしております」は、ある程度学力があれば“I'm looking forward to seeing you again.”と躊躇なく書ける。ただし、少しでも込み入った内容になると、日本文の概念を英語という別の論理と構造を持つ形式に移し替えるという課題に直面する。「車の混雑によって高速道路で長時間の遅れが出ている」という文が意味する状況から、学生はどのようなくも

の〉を取り出すことができるだろうか。その日本語に対応する英語は、“Heavy traffic is causing delays on the freeway.”である<sup>(1)</sup>。〈車の混雑〉が原因となって〈高速道路〉上で〈遅れ〉という結果を引き起こしていると解釈するのである。〈車が混雑して大幅な遅れが出ている〉という状況把握からheavy trafficとdelayをcauseで結ぶには、語彙力だけでは不十分で、日英の発想の違いを意識するメタ認知が求められる。そこで、本稿では日英の対照という観点から英作文上達への手がかりを探っていく。

## 2 動作主の問題

### 2-1 日英対照研究

これまでの日英対照研究の中で両言語の表現形式の背後にある意味の構造を体系的に分析した研究として池上嘉彦氏の「する」言語と「なる」言語の分類がある。「する」言語とは状況の中の変化する個体に注目するタイプの言語であり、「なる」言語は状況変化の全体に注目するタイプの言語である。「する」と「なる」の言語類型はそれぞれ

の文化構造をも視野に入れた言語の捉え方で後発の研究に大きな影響を与えてきた理論である。

また、英語は「名詞表現」に特徴があり、日本語は「動詞表現」に特徴があると従来の日英対照の研究において言われてきた。最近の考察でも、「英文の中に動詞が含まれていなくても、日本語では動詞に変えて解釈すると自然な日本語になることがあり、逆に、日本語では動詞で表されている部分も、英語では名詞や形容詞あるいは副詞で表すと自然になる」<sup>(2)</sup>として両言語の文における動詞の意味の比重に言及する見解がある。

また日本語を母語としない研究者からの意見として興味深いのが、John HindsのSituation focus (状況志向)と特徴Person focus (人間志向)という分類である。前者が日本語の特徴で後者が英語の特徴である。例えば車の所有に関して日本語は「車があります」と表現するのに対して、英語は“I have a car.”と所有者への言及から始めるのが自然であるという指摘である<sup>(3)</sup>。

以下、〈する〉と〈なる〉、〈名詞表現〉と〈動詞表現〉、〈人間志向〉〈状況志向〉という特徴づけの相互の関係性を探りながら、英作文指導における手がかりを探っていく。

## 2-2 動作主

池上は吉川幸次郎が講演で万葉集巻六の歌の一節(葦辺ヲサシテツル鶴鳴キ渡ル)の「鳴き渡る」が英語ではgo cryingに訳されることに疑問を呈した点に関して、「一方は個体の運動に注目し、他方は全体的な場の推移としている」と解説した<sup>(4)</sup>。個体の運動に注目するのが英語の特徴であり、全体の推移に注目するのが日本語の特徴であるとする。そのような見方の根拠として池上は次のような仮説を立てる(國廣哲彌編, p.73)。

仮説I: 言語外的な出来事が言語によって表現される場合、(1)その出来事に関与するある特定の個体に注目し、その個体を際立たせるような形で表現を構成する傾向、(2)その出来事を全体として捉え、そこに関与する個体があっても全体に含め、埋没させるような形で表現を構成する傾向、がある。英語は(1)の傾向が顕著な言語であり、日本語は(2)の傾向が強い。

次の英文は『ロングマン英和辞書』(p.1312)に掲載されている例文とその日本語訳である。

2 I feel we have made a lot of progress in this meeting.  
この会議でかなりの進展があったと思う。

英文の従属節は、「私たちは話し合いを通じて(問題解決に向けて)前進した」という内容で、「私たち」の活動に意味の焦点がある。一方、日本語訳は「かなりの進展があった」と状況全体の変化に言及している。だれが当事者であるかは文脈から判断することになる。日本語では「話し合いが進む」「話し合いが進まない」という表現をしばしば用いるように、話し合い自体あるいは話し合いの経過に多くの注意を向ける。

では英作文の問題として、「この会議でかなりの進展があった」という自然な日本語を英訳するならば、学生は何を主語に選ぶだろうか。

池上はさらに次のような仮説を立てて、英語の特徴を指摘する(國廣哲彌編, p.73)。

仮説II: 言語外的な出来事が言語によって表現される場合、(1)その出来事に関与して〈動作主〉として行動する〈人間〉に注目し、それを特に際立たせるような形で表現を構成する傾向、(2)その出来事を全体として捉え、そこに〈動作主〉として行動する〈人間〉が関与していてもなるべくそれを際立たせないような形で表現を構成する傾向、がある。英語は(1)傾向が顕著な言語であり、日本語は(2)の傾向が強い。

仮説Iでは出来事に関与する個体に注目し、仮説IIではその個体として人間とりわけ動作主としての役割を持つ人間に注目する。

3 Did you enjoy the movie?

映画はおもしろかった?

「映画はおもしろかった?」(『ロングマン英和辞典』, p.522)の格助詞「は」は「映画」を文の主題にするので、文全体として映画に関する話し手の感想を表している。他方、英文はyouを主語とする他動詞構文の疑問文で、人間を動作主とした行為に関して返答を求めている。

「～はおもしろい」「～はおもしろくない」は日常頻繁に使う表現である。学生にそのような日本語を英訳させると、かなりの学生が「～は」で示されている言葉を主語とするSVC構文で英訳する。そこで、英語教師は動作主を主語、享受する対象を目的語に持つenjoyを用いてSVO構文で表現できることを示すことになる。enjoyの用法自体はやさしいが、出来事に関与する主体を表出することを控える傾向のある日本人が主語や目的語に対応する個体を取り出す思考を会得するのは必ずしも簡単ではない。

- 4 Enjoy your meal  
どうぞ召し上がりください。

「召し上がってください」(『ロングマン英和辞典』, ibid.)を英訳させると enjoy your meal と即座に英訳できる学生は少ない。これは実際の場面を経験していないことが大きな要因なのかもしれないが、表現として表出されていなくても話し相手を enjoy の意味上の主語として捉え、享受する対象を meal と言語化する思考が求められるのである。

### 2-3 無生物主語

英語の特徴のひとつとして無生物や抽象概念が主語になることが挙げられる。

- 5 A curtain separated the kitchen from the living room.  
キッチンと居間はカーテンで隔てられていた。

日本語訳(『ロングマン英和辞典』, p.1514)では、「キッチン」と「居間」が主題され、「カーテン」は格助詞「で」が付いて動作の手段として表されている。キッチンと居間という場所がカーテンという手段で仕切られていたというのが日本語の大意である。一方、元の英文では curtain は主語として目的語である kitchen を居間から分ける動作主の役割を果たしている。池上(國廣哲彌編, p101)は「英語で最も好まれる文の意味構造は‘actor-action’であり「<動作主>が主語という特権的な位置に置かれる文型である」と述べる。例文 5 は, curtain を作用する<もの>として捉えて, カーテンがキッチンに働きかけて居間から分けたと表現している。

## 3 名詞表現と動詞表現

### 3-1 名詞中心と動詞中心

英語の表現は名詞中心で日本語は動詞中心であるとししば言われる。例えば、外山滋比古は、「西洋の言語が名詞中心構文であるのに日本語は動詞中心の性格が強い。『この事実の認識が問題の解決に貢献する』というのが名詞構文なら『これがわかれば問題はずっと解説しやすくなる』とするのが動詞構文である」<sup>(5)</sup>と述べる。具体例として、「ある人間が速く走ることができるときに、日本語では、『彼は足がはやい』というが、英語では He is a fast runner (彼ははやく走り者である)とする」を挙げ、「名詞構文は中心概念を名詞に託すが、動詞構文法では動詞にそれがあずけられる」と説明する。

外山の主張は妥当であると思われる。なお、「彼は足がはやい」には “He is a fast runner.” だけでなく “He runs fast.” も対応する。さらに、「彼は高校生です」は He is a

high school student よりもむしろ He goes to high school のほうが英語らしく、「私はABCの社員です」は “I am an employee of ABC” よりも “I work for ABC” のほうが英語らしいという意見もある<sup>(6)</sup>。いずれも SVC ではなく SVO の構文を用いるのである。このような対比は、英語は名詞中心で日本語は動詞中心であるという意見にはいくつかの補足が必要であることを示唆する。

### 3-2 「もの」と「こと」

安西徹雄は、英語の名詞表現を分析して『「名詞中心」という特徴は、『動作主+他動詞+目的語』の形式、ななく『無生物主語』の構文とししばしば結びつく』と述べて<sup>(7)</sup>、次のような例を提示する(安西, p.62)。

- 6 A slight slip of the doctor's hand would have meant instant death for the patient.

(直訳) 医者の手のおぼろげな滑りが、患者のたちどころの死を意味したであろう。

(意訳) 医者の手がほんのわずかに滑っても、患者はたちどころに死んでいたであろう。

“a slight slip of the doctor's hand” (医者の手のおぼろげな滑り) と「医者の手がほんのわずかに滑って」, “instant death for the patient” (患者のたちどころの死) と「患者はたちどころに死んでいた」をそれぞれ比べると英語の名詞的特徴と日本語の動詞特徴の意味するところがよくわかる。安西は日英の性格を特徴づける要因として、池上が指摘した事象に対する「もの」的捉え方と「こと」的捉え方の違いを挙げている。

池上は「<もの>と<こと>は外界における存在と相互排他的に区分する範疇ではなく、もっぱらわれわれの認識の様式に係った範疇」であると説明する。<もの>と<こと>の区分に関して、池上は Langacker の知見に基づいて「話者は<認知の主体>として同一の<事態>であっても、それをいくつかの違った仕方で<把握>し、違った<事態把握>の仕方に依って違った仕方で言語化する能力を有している」と述べる<sup>(8)</sup>。したがって、例文 6 における “a slight slip of the doctor's hand” (医者の手のおぼろげな滑り) と「医者の手がわずかに滑って」の違いは、同じ事態に対する事態把握の種類の相違から説明されるのである。つまり、英語の名詞的特徴とは<もの>的把握の別名であり、日本語の動詞的特徴とは<こと>的把握のことである。

## 4 人間志向と状況志向

### 4-1 人間志向と状況志向

John Hinds の『日本語らしさと英語らしさ』は、彼と日

本人の友人が飛行機で旅行しているときの興味深い逸話を紹介している (p.22)。客室搭乗員が飲み物を配る際に英語話者の彼には Would you like some tea? と尋ね、友人には「お茶はいかがですか」と声をかけた。また、出入国カードを配った後で Have you filled the form yet? と彼に声をかけ、友人には「よろしいですか」と話しかけた。日本語の発話にはいずれも主語はなく、とりわけ「よろしいですか」には状況に関する具体的な情報は一切含まれていない。しかし、日英語いずれの発言も自然で妥当な発話であり、各場面でそれぞれ十分機能している。

このような日英の表現の差について、Hinds は “Japanese speakers focus on situations whereas English speakers focus on people when they speak.” と述べて、日英の表現形式の違いは、“situation focus” (状況志向) と “person focus” (人間志向) の違いにあると解釈する (p.26)。

#### 4-2 個体と連続体

野村益寛は、池上の「〈こと〉であることの本質は、〈もの〉的な要因をすべて全体の中に融解し去っているということである。それは、連続体の一部にすぎない。連続体的なイメージをその本質的な姿において帯びるものとして、〈こと〉は〈変化〉の様相において捉えられた場合には〈なる〉的な性質をしめすはずである」を引用して、「〈こと〉と〈なる〉の対比は〈もの〉と〈こと〉さらには〈個体〉と〈連続体〉の対比と関係づけられていく」と指摘する (池上, 2007, p.366)。

したがって、池上の仮説IとIIを繋ぐと以下のようにまとめることができる。まず、ある状況を個々の個体に注目して捉えるか、あるいは個体を含む状況全体に注目して対象を捉えるかという認知のあり方がすべての出発点となる。個体のうち最も際立つのは動作主である。英語はこの動作主を主語にしてその活動を言語化 (SV構文) する、あるいは動作主と動作主が働きかける別の個体 (目的語)

に注目して言語化 (SVO構文) する傾向が強い。英語のこのような特徴が、〈こと〉言語、名詞中心、あるいは人間志向という表現で説明されるのである。一方、日本語は状況全体の変化に注目して言語化する。個々の個体は全体の一部として埋没しがちなので必ずしも言葉として表出されない。このような特徴が〈なる〉言語、動詞中心、状況志向であると説明されるのである。

#### 5 まとめ

本稿の目的は、これまでの日英対比の成果を再考して、その知見を英作文指導の手がかりとすることであった。以下、その点に関してまとめる。

池上の〈こと〉言語と〈なる〉言語という類型化は、〈こと〉的な言語表現と〈もの〉的な表現の区別が基本にあり、その区分はある状況を〈個体〉に注目して捉えるかあるいは個体を埋没させた〈連続〉として捉えるかという認知の仕方に基づくものであると考える。このような視点に立てば、日英の特徴である〈こと〉と〈なる〉、〈名詞中心〉と〈動詞中心〉、〈個人志向〉〈状況志向〉という別々の特徴の関連性が見えてくる。

上記の日英対比から、日本語は個々の個体には深くかわらずに出来事が起きること自体を表す傾向が強いことがわかる。したがって英訳するには必ずしも言語化されていない個体を捉えて個体と個体の関係を表出させることが最も重要である。例えば「道路に氷が薄く張っていた」という表現が示す状況からどんな〈個体〉を掬い取ることができるだろうか。「道路」と「氷」ならば、次に「氷」と「道路」の関係、さらにどのような「氷」かが問われる。7に対応する英文は “There was a thin layer of ice on the road.” である (ロングマン英和辞典, p.916)。「氷が薄く張った」という動詞的表現 (〈こと〉的見方) から “a thin layer of ice” という名詞的表現 (〈もの〉的見方) を導くことができるかが英作文の鍵となる。

#### 注

- (1) ピアソン・エディケーション, 2007, 『ロングマン英和辞典』, p.244
- (2) 菅井三実, 2012, 『英語を通じて学ぶ日本語のツボ』, 開拓社, p.150
- (3) Hinds, John, 1986, 『日本語らしさと英語らしさ』, ころしお出版, p.27
- (4) 國廣哲彌 (編), 1982, 『日英語比較講座第4巻発想と表現』, 大修館書店, p.72
- (5) 外山滋比古, 1987, 『日本語の論理』 (中公文庫), 中央公論新社, p.11
- (6) ケリー伊藤, 1999, 『書きたいことが書けるライティング術』, 研究社出版, p.65
- (7) 安西徹雄, 2000, 『英語の発想』 (ちくま学芸文庫), 筑摩書房, p.61
- (8) 池上嘉彦, 2007, 『日本語と日本語論』 (ちくま学芸文庫), 筑摩書房, 353-354